子供先生の親友〜外伝

鈴鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
子供先生の親友～外伝

【Ｎコード】
Ｎ００９３Ｗ

【作者名】
鈴鹿

【あらすじ】
ここに掲載される話は、いずれも『子供先生の親友』で生徒に与えられた選択肢で正規ルートとはまったく違う出来事を引き起こす選択をしたｉｆの話。
この話の先に原作の未来はない。
あるのは無数に枝分かれした世界の１つの物語。

注意
コチラは本伝以上に不定期更新となります。

コメントで感想などもらえれば、燃料になって執筆速度が上がるかもしれませんが、あまり期待はしないで下さい。

課外授業1時間目『麻帆良崩壊の引き金』（前書き）

今から始まる話は
『もしも千雨が非常識な麻帆良の崩壊を願ったらどうなるか？』
という世界です。

麻帆良の常識に苦しめられた千雨が、エリオと共に外の常識を麻帆良に取り戻すために戦う話です。
時期的には、春休み編の終わりからここに入ります。
それまでの設定は、すべて引き継がれます。それ以降の設定は引き継がれません。
そして、ここでできた新しい設定も本伝には影響しません。（本伝で同じ設定ができるかもしれませんが、外伝の影響ではありません）

これらをふまえてお読みください。
別に読まなくても、本伝に影響はありません。

課外授業1時間目『麻帆良崩壊の引き金』

千雨ｓｉｄｅ

春休み前に、先生が私を否定して、とても安心した。
おかしいのは私じゃない。
おかしいのは麻帆良の方だ。そして、麻帆良の常識にとらわれた奴らだ。
先生は、言った。
私が望むなら、その非日常を壊そうと……
このまま放っておけば、麻帆良の外で私と同じ思い、いや周りも自分も大人な分それ以上に酷い思いをするかもしれない。
下手すれば、狂人扱いされてもおかしくないだろう。
今の私が、昔のように『外の常識』を真剣に唱えれば、そうなるだろう。
一生を麻帆良の外に出なければ問題ないだろうが、全員がそれを出来るはずもない。
そう考えると、今の状態を放置していても何もいい事はない。
このままの状態で喜ぶのは、麻帆良を歪めた生粋の異常者達だけ。
先生も生まれながらにそっち側らしいけど、思考はまともだから除外する。
なんてことはない。私が望めば、麻帆良はただの学園歳都市に戻る。
それが正しい。今が間違っている。
例え、私以外が違和感を持たずに麻帆良の常識に馴染み、楽しい生活を送っていてもそれは今だけ。
そう長くは続かない偽りの幸せ、その後に続く不幸の方が何倍も長くきつい。
それなら、それは少しでも少ないほうがいい。
春休み中、ずっと悩み続けた私は、ついに非日常を壊す決意をした。

いや、麻帆良を日常に戻す決意を持って、エリオ先生の元へ向かった。

それが引き金。

引くのは私の意志。

標的は非日常。

その先に見えるのは、一体なんだろう？

その先に見えるのは、日常のはず。

私はそう信じて、引き金を引いた。

「先生、私は麻帆良を壊してほしい。ここから失われた外の常識を取り戻すために！」

課外授業1時間目『麻帆良崩壊の引き金』（後書き）

今回は、千雨が麻帆良を壊す決意を持つ話でした。
生徒のためという大義名分を得て、主人公エリオはこれから麻帆良（魔法使い）と戦争（喧嘩）します。
たった一人対巨大な組織。
その戦いの行方はいかに！

課外授業２時間目『まずは監視対策から』（前書き）

本伝やら分岐した独走やらに集中していたせいで、すっかり更新停止していた外伝でしたが。この度、続きが読みたいという感想を頂いたのでまだ完成してない先週分（１０月最終週）のゼロ魔を放り出して書きました！（↑おい！）

課外授業2時間目『まずは監視対策から』

千雨に学園結界や認識阻害、魔法と魔法使いの存在を全て話した次の日、俺は昼休みに屋上へ呼び出された。

「あの件で話があります。放課後空いてますか？」

「ああ、わかった。何処で話す？　余り他人の耳に入れていい話じゃないからな。それと、あざわざ敬語を使わなくてもいいぞ。素の千雨でいい。先生とは言え年下だしな」

「わかった。そうさせてもらう。人の耳に入らない所って言われても……。はっきり言ってどこで話しても魔法使いの耳に入りそうにだけど」

そう言って千雨は周りをキョロキョロと見回す。

今も魔法使いに見られているんじゃないか、聞かれているんじゃないかと不安なんだろう。

「ああ、そういう特殊なのは俺が対処するから、単純に人が居なくて邪魔されにくい場所でいい」

「じゃあ、私の部屋で。あと、そういう特殊なことがない場所とかはない？　どこいても常に見られてるんじゃないかって考えると落ち着かなくて」

「まずないな。普段していないところはいくらでもあるだろうが、その気になれば寮の個室だろうがトイレの中だろうが、何の障害もなく目や耳を置ける」

それを聞いて、千雨の顔ますます顔が青くなる。

余計なことだったかな？　しかし、事実だしな。

「マジかよ……　プライバシーなんだと思ってんだよ！？」
「もちろん、そういう場所での監視魔法は禁止だ。向こうの世界でもプライバシーの侵害は犯罪だし、そういうことが出来ないように建物自体に重要な場所には防諜術式を組み込んである。個人のプライベート空間なら防諜とまでは言わなくても、そういったことを知らせる警戒術式があるのが普通だ。監視というか遠見だな。その魔法は向こうの世界なら簡単に習うことが出来るが、対抗術式を知られずに抜くとなると、その道のプロに限られる。少なくとも今は大丈夫だ。本業だと怪しいがそういう奴らの働き先は、向こうの国々だから安心しろ。こっちの世界の生徒と教師の会話を聞くような暇人は居ないよ」

そういうと、少し顔色がマシになった。
やはり、常に見られている聞かれているかもしれないと疑心暗鬼の状態で過ごすのはきついだろうからな。
後で、警戒術式を組み込んだマジックアイテムでも渡すか……

「嫌なプロだな」
「笑い話じゃないぞ？　現にそういうプロは、居るからな。スパイの魔法使い版とでも言えばわかるか？」
「最悪だな。それなら凶悪犯と魔法とか最悪の組み合わせじゃねえか……」
「魔法なんて力でしかないからな。凶悪犯が拳銃を持ち、それを追う警官が拳銃を持つのと同じだ。ただ、性質が悪いことに、その武器が個人によって性能が異なることだな」
「同じ武器を持っているなら扱いの上手さで上下が決まるけど、そもそも持っている武器の性能が違い過ぎる場合があるってことか」
「そういうことだ」
「ますます、関わりたくない世界だ」
「だから知らない方がいいと言っただろう？　記憶を消したくない

という以上、知ってしまったらそれまでだ。それとも今から記憶を消すか？　俺はそういうのは好きじゃないが、消してくれと願うなら……」
「その選択だけは絶対にしない」
「わかった。もう二度と口にしない。じゃあ、放課後に」
「ああ」

屋上で別れた後、購買によって売っていたデフォルメされた鼠（？）らしきキャラクターのストラップを購入し、警戒術式を組み込んだ即席マジックアイテムを作った。
デフォルメされたキャラクターに特に意味はない。術式が刻めて、常に身につけていられて怪しくない物ならなんでもよかった。
このストラップは、持ち主が遠見の視覚範囲に入ったり、遠聴の集音範囲に入っていると振動した後に点滅する。
範囲から外れれば、もう一度振動して光が消える。
携帯の契約者を持ち主と認識するので、携帯を持っていなかったり携帯に付けていないと効果を発揮しない。
また、持ち主以外にはただのストラップにしか見えないので、遠見の視覚範囲内で見ても、まず気付かれない。
他にも、いざという時に役に立ちそうな術式を組み込む。

――――放課後

女子寮の千雨の部屋を訪れる。
途中で会った生徒には進路相談をしに行くと言ってある。
誰のことなのか聞く者も居たが、プライバシーの保護で誤魔化した。
千雨の部屋が見えたところで、他の寮生の目がないか確認し、インターホンを鳴らした。

「開いてるよ」

「失礼する」
再度誰も居ないことを確認して中に入った。
千雨は制服のまま俺を出迎えた。
「まずは、これを」
「なにこれ？　ストラップ？」
昼休みに作った警告ストラップを渡し、効果を説明した。
千雨は早速携帯につけて反応を見る。ストラップは震えもせず、光もしない。
今のところ、この部屋を監視している魔法はないようだ。
「はぁ……　やっとゆっくり出来る」
「悪いな。あんなことを言うべきじゃなかった」
「いや、私ももしかしたらって考えてたし、ああやってすっぱり言ってもらえた方が中途半端に警戒するよりいいよ。もう携帯は肌身離さず持つことにする」
「一応、この部屋に防諜術式を施すことも出来るが……」
「マジ！　早速……」
「が、それはやめた方がいい」
「なんで！」
「今まで千雨は魔法のこと知らない一般人だった。俺以外は、今もそう思っているはずだ。今のところ監視対象になっていないとは言え、何かの拍子に監視魔法で部屋を覗かれた時に、防諜術式で弾いたら間違いなく接触してくるぞ？」
「う……　それはいやだ。その先はアレだろ？　記憶を消されるだとか監視下に入れられるんだろ？」
「間違いなくな」
「くう……　プライバシーを守る方法があるのにそれが使えないな

んて……」

本当に悔しそうだ。

そんなに知られたくないことでもあるんだろうか？

まあ、私生活を覗かれていい気がするはずもないか。

「それで、本題に入ろう。千雨、お前はどうしたいだ？　魔法の存在を忘れる選択をしないなら、残る選択肢は魔法に関わるか関わらないか、それとも……」

最後の選択肢を遮って、千雨が言った。

「先生は前に言ったよな。『もし外に出れば、待っているのは過去の私と同じ末路。いや、大人な分もっと酷いかもしれない』って」

「ああ、言ったな」

「私は、未だにあの辛さを忘れられない。今でも時々夢に見て魘(うな)されるくらいだ」

「そうか……」

「もし、麻帆良を出たらあれ以上の辛さを、あいつらは味わうことになるんだな？」

「おそらくな。千雨が持つ『外の常識』を麻帆良で異常だと思うように、『麻帆良の常識』を持つ生徒達は麻帆良の外で異常だ。まして、規模が違う。麻帆良は単なる学園都市、外は世界。中には魔法使いも居るが、それを差し引いても異常視する人数が違う」

「だよな……」

千雨は目を瞑り深呼吸をした。

そして、開いた千雨の目には決意の炎が宿っていた。

「先生、私は麻帆良を壊してほしい。ここから失われた外の常識を

取り戻すために！　私が普通の日常を得るために！　そして、これ以上私のように辛い思いをする奴を増やさないために！」

課外授業２時間目『まずは監視対策から』（後書き）

番外編を書き始めた時は、ルート分岐する予定もなかったし、まして分岐した両方のルートを書く予定もなかった。
アンケートをとった時も、普段あんまり感想をもらえないからそんなに投票されないだろうなーとか考えてたら、どっちも５０票越えて友人に殴ってもらって現実かどうか確かめたりしてたせいで、すっかり疎かになってました。
本当は、独走か成長のどちらかとこの外伝の２つにするつもりだったからな……
でも、この度初めて外伝で感想を貰い、続きが読みたいと言っていただいたので、再起動しました。
更新速度は明言できませんが以前のように１ヶ月も放置したりしないようにします。
今後とも、親友の外伝をご愛読いただければ幸いです。

課外授業3時間目『千雨は力を得る』（前書き）

今回は千雨に力を与える話です。
会話文がほとんどです。

課外授業3時間目『千雨は力を得る』

「本当にいいのか？　今の麻帆良は確かに異常だが、長年過ごした千雨にとっては日常になりつつある。そりゃ、目を逸らすような異常も多いだろうが、常識の範疇に収まる日常だって中にはある。それも壊すことになるかもしれないんだぞ？」

「覚悟の上だ」

「そうか。なら俺から言うことはない。1ヶ月以内に魔法使いを異常を、この麻帆良から消し去ってやろう」

千雨の決意と返事を受け取り、俺は立ち上がった。

今から一ヶ月忙しくなりそうだ。

「待ってくれ。私にも何か手伝える事はないか？」

「やめとけ。魔法を無くすためとは言え、魔法に関わるな。最悪、失敗することだってありえるんだ。その時に無関係を装えば少なくとも現状から悪化する事はない」

「確かにそうかもしれないけど……でも、他人に危険なことをやらせて、安全な場所から高みの見物なんて我慢できない。それに、私が頼んでやってもらうんだ協力するのは当たり前だ！」

「ダメだ。麻帆良を壊すならなおさらだ。これから日常で生きていくなら余計な事をするべきじゃないし、知るべきじゃない。この件に関われば、裏を知ることになる。魔法云々ではなく組織の裏をだ。麻帆良を潰したところで組織がなくなるわけじゃない。関東魔法協会という組織が名前を変えるだけだ。裏を知れば、組織に追われることになる」

「これは復讐でもあるんだ！　今の私を作ったのは麻帆良の異常な環境で、それを作ったのはその組織の連中だ。そいつらに私が味わった苦しみと同じくらいの苦しみを味あわせなきゃ我慢できない」

ああ、決意の中には『復讐』の決意も入ってたのか。
今の千雨の目は鈍く黒い光が宿っていた。
あれは、復讐を誓った者の目だ。向こうの世界の大戦で、何度も目にした暗い目だ。

「わかった。それなら手伝ってもらおう」
「本当か！？」
「ああ、ただし危険なことはさせないからな」
「それはもちろん。せっかく日常に戻れるって言うのに、死んじゃったら意味ないからな」
「じゃあ、額に触れるぞ」
「うん」

発動体代わりの指環をつけて、額に触った。

『病毒の女王、病毒を運ぶ八つ足の蜘蛛、張り巡らせ感染の糸。静かに密かに広く深く毒の種を撒け。響け苦痛の呻き、響け怨嗟の声、響け絶望の叫び。《埋毒の網》』

指環が淡く発光し、魔法が掛かったことを知らせた。

「よし、完成」
「なんか物騒な呪文だったけど、あたしには影響ないんだよな？」
「ああ、コレは魔法使いにしか聞かない呪いだからな。千雨が魔法が使えるなら影響あるけど」
「そんなの使えたら、今頃そっち側にいるよ。それでどんな効果なんだ？」
「触れた相手は一生魔法が使えなくなる。しかも、千雨が触れた相手が誰かに触れば同じ呪いが掛かる。まぁ、感染力の高い病気とで

も考えればいい」
「それなんて鼠算だよ……。にしてもエグ過ぎるだろこの魔法。いや、呪いか」
「魔力も気も系統は、違えど魔法を使うために必要な力だ。それを使えなくすれば、知識があるだけの一般人だ」
「燃料のない車と同じか」
「そうだ。まあ、一般人として生きるならどっちも必要のない力だし、一般人が呪われる分には一切影響がない。感染源を増やすだけだけだから、復讐には持って来いだ」
「なら、先生には触れない方がいいか？　先生も魔法が使えなくなるんだろ？」
「ああ、俺には効かないから。なんせその魔法を作ったの俺だし。製作者が呪われたら意味ないだろ」
「ダメじゃん！　先生が他の奴らの呪いを解いたら元の木阿弥じゃんか！」
「そのためにはいコレ」

懐から黒いリボンを取り出して渡、千雨に渡す。

「なにこれ？」
「これはさっきの呪いを込めたリボンだ。コレを俺に結べば、俺も魔法は使えない」
「でも、解けるんだろ？」
「いいや。このリボンで呪ったら俺でも解けない。呪いを付加したリボンが体と同化するから、体自体が呪いの核になる。解こうと思ったら体を塵も残さず消さなきゃ無理だ」
「要するに死ななきゃ解けないと」
「その通り。全てが終わったら、千雨が俺に結べ。そうすれば、呪いを解ける者は居なくなる。魔法使いでない限り、誰が感染者かわからないから、魔法使いは人前に姿を表さなくなる。うっかり感染

者に触れれば魔法が使えなくなるからな。いずれは、全魔法使いが感染して、魔法なんて力は消えるだろうよ。生まれた子供にも呪いは感染するしな」
「ものすごい呪いだな」
「当たり前だ。こんなもん1度使ったら、世界から根絶するなんて不可能だからな。解呪の手順や呪いの術式構成も個人ごとに異なるから、同じパターンは存在しない。いわば、ワクチンのない感染症だ。もし、死ぬような病気でそんなものがあったら、今頃人間は生きていない」

人類が天然痘を根絶させただけでも奇跡だからな。
ワクチンも予防接種もない接触感染型の病気を根絶するなんて不可能だろう。
もし奇跡的に出来たとしても、一体何百年の時間がかかるんだろうな。

「で、どうすれば、感染させられるんだ？」
「相手に触れるだけでいい。ただし、すぐに効果は出ない。今から一ヵ月後に呪いが発動する。それまでは気付けないし、普段と同じように魔法が使えるからな」
「じゃあ、私は誰かに触れて回ればいいんだな？」
「ああ、あとは感染者になった奴が広めてくれる。ただし、肌同士の接触じゃないと意味がないからな？　服越じゃ感染させられない」
「わかった。これで、私の人生を台無しにした奴らに復讐してやる！」

今の千雨には自分の手が何物にも勝る武器に見えるだろう。
さあ、覚悟しろ。魔法使い。
魔法という力に別れを告げろ。
貴様らは選ばれた人間にあらず、いや選ばれた人間など誰もいない。

今までの高慢の報いを受けろ。

課外授業3時間目『千雨は力を得る』（後書き）

復讐のために千雨に力を与えました。
解呪出来るのは、製作者であるエリオただ一人。

クリスマス番外編『第４次聖杯戦争・参戦』（前書き）

独走に投稿したクリスマス番外編を修正・移動しました。

今回の番外編はタイトルから判るように、エリオが第４次聖杯戦争のサーヴァントとして召喚されるお話。

さて、クラスとマスターは誰かな？

クリスマス番外編『第４次聖杯戦争・参戦』

冷たく暗い地下の底で、一人の男の声が響く。

「閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）、閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する」

男は片目から血を流しながら、これからの戦いを思う。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

後ろに佇む爺の手から、一人の少女を救うために始まる。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪と成る者」

自らの行いに悔いはない。

「されど、汝はその目を混沌に曇らせるべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。
我はその鎖をたぐる者」

だから、その身、その命の総てを賭けて賽を投げた。

「汝、三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

もう後戻りはできない。
男が歩む道に先はなく、光もない。
男は、ただ暗く先がないと知りながらも、深淵に歩みを進める。
だが、深淵に向かった男は、その先で光を得た。
その光は、冷たく暗い地下と光無き道を歩む男を照らした。

雁夜ｓｉｄｅ

視界が光に包まれるのを見て、俺はその場に膝をついた。
サーヴァントの召喚に魔力を根こそぎ奪われ、その魔力を生み出すために刻印蟲が俺の肉体を喰らう。
今の俺は搾り滓も同然だ。
自らの足で立つことすらできず、呼吸をするだけで体に激痛が走る。
それでも、桜ちゃんを救う唯一の手段であるサーヴァントを確認しようと首から上を動かし目を凝らす。

「な……！？」

そして、俺は驚きに目を見開いた。
そこにいたのは、スーツを纏った少年……いや、子供と言っても通じるような男の子だった。
まさか、俺は召還に失敗したのか？
慌てて呼び出したサーヴァントのステータスを確認し、絶望した。

□□□□□□□□□□

クラス：バーサーカー
マスター：間桐　雁夜

属性：混沌・狂

パラメーター

筋力：Ｆ　耐久：Ｆ－　敏捷：Ｆ　魔力：Ｅ　幸運：Ｅ　宝具：×

クラススキル

狂化：Ｅ

狂化の恩恵を受けない変わりに、正常な思考力を保つ。

□□□□□□□□□□

狂化による強化はなく、パラメーターも貧弱。

バーサーカーとは名ばかりの雑魚だった。

「召喚の声に呼ばれてきたんだけど、君が召喚者で間違いないかな？」

「あ、ああ……」

「理性を保つバーサーカーじゃと！？　しかし、このパラメーターではのう……」

後ろで臓硯がバーサーカーでありながら理性を保っていることに驚き、次いで落胆した。

おそらく、俺に寄生している刻印蟲（使い魔）を通して、あのパラメーターを見たのだろう。

確かに、あんなパラメーターじゃあ聖杯戦争を勝ち抜くのは不可能だ。

すまない。桜ちゃん。俺は……

「では、名前を教えてくれ。まだきちんと契約出来ていないからね」

「間……桐雁……夜」

息も絶え絶えの状態で、俺は自分の名をバーサーカーに告げた。

「間桐　雁夜か。俺はエリオット・クルーデル。以後、よろしく頼む。マスター雁夜」

お互いに名前を交換し、正式に契約が結ばれた。

バーサーカーの真名を知ったことで、ステータスが更新された。

「「なっ！？」」

□□□□□□□□□□

真名：エリオット・クルーデル

クラススキル

狂化：E（A＋）

狂化の恩恵を受けない変わりに、正常な思考力を保つ。

暴走時にランクが上がり、全パラメーターを2ランクアップするが、マスターの制御さえ不可能になる。

固有スキル

単独行動：A（A＋）

心眼・真：A（心眼・偽：A）

魔法：A（C）

感卦法：B

異形：B

宝具

？？？

ランク不足により使用不可

？？？

ランク不足により使用不可

□□□□□□□□□□

狂化に暴走時のランクが付け加えられ、固有スキルが軒並み高ランクだ。

これで、パラメーターさえ高ければ……

いや、暴走させれば勝ち目はあるかもしれないが、俺にそれを維持するだけの魔力も制御する精神力もない。

落ちていたところを上げて、また落とされた気分だ。

せめて、俺に魔術師として戦えるだけの力があれば……

「カ……呵々々々！　雁夜よ。よくやった！　お主は聖杯以上の宝を引き出しおったわ！」

「なんだと？」

醜悪な老魔術師が顔を歓喜に歪め、声を上げて笑った。

こんな最弱のサーヴァントと言っても過言ではない者を呼び出して、何故誉められる？

臓硯が俺を誉めるなんて事は、今まで一度もなかったというのに……

「バーサーカーとして呼ばれながら理性を保ち、魔術ではなく魔法を習得しているとは！」

「爺。貴様は何者だ？」

バーサーカーは、杖を突きながら近寄ってくる臓硯に警戒の視線を向ける。

しかし、臓硯は気にした様子もなく、歩みを続ける。
いくらサーヴァントと言えど、あそこまでパラメーターが低くては臓硯に勝てないだろう。
Fランクの能力は、そこらの一般人と変わらない程度の強さでしかないはずだ。
一般人程度の力で、臓硯に勝てるはずがない。

「儂はそやつの祖父、間桐　臓硯と申す」
「そうでしたか。それで、その祖父殿が私になにかご用でしょうか？　私は早々にマスター雁夜を治療しなければならないのですが」
「その必要はない。そやつのような出来損ないの主では、お主の力を完全に発揮出来んじゃろう？　そこで、儂がそやつに変わってお主の主になり、代理で参加しようと思ってのう。どうじゃ？　お主にとっても悪い話じゃなかろう？」

確かに、俺じゃあバーサーカーを弱体化させ、最低なパラメーターを持つバーサーカーに対してすら俺は足手まといになる。
だが、どんなに弱くてもバーサーカーは桜ちゃんを助ける唯一の手段なんだ！
臓硯に取られるわけにはいかない！　激痛が走る体に鞭を打って立ち上がる。

「バーサーカーは渡さない。俺は、聖杯を手に入れて桜ちゃんをあの地獄から救い出すんだ！」
「マスター雁夜がこう仰っているので、申し訳ありませんがその話はお断させていただきます。それに、私も今のマスターを気に入っていますから」

バーサーカーが勧誘を断ると、臓硯の目が私の方に向いた。

「ほう……随分と大言を吐くものよの、雁夜。死に損ないのお前など、儂の手に掛かれば一瞬で葬れるというのが理解出来んわけではあるまい？　残り僅かとは言え残った命をここで無様に散らすか？」

臓硯からおびただしい殺気が俺に向けられた。

「つ！」

「祖父殿。サーヴァントとして、マスター雁夜への攻撃を見逃すわけにはいきません」

一瞬怯んだ俺と臓硯の間にバーサーカーが入り、殺気から俺を守る楯になった。

「やって見ろよ。くそ爺！　その前に、令呪でバーサーカーを自害させてやる！」

バーサーカー越しに臓硯を睨みながら、そう宣言した。

バーサーカーには悪いが、おいそれと桜ちゃんを救う可能性を渡すわけにはいかない。

例え最低なパラメーターだったとしても、１％でも可能性があるなら、俺はやってやる。

臓硯は不機嫌な表情で考え込み、すぐに口を開いた。

「雁夜よ。貴様は、あの胎盤を助けるために儂の命令でバーサーカーを呼んだな。では、バーサーカーを儂に寄越す対価として、あの胎盤をくれてやる。それなら文句はあるまい？　勝てもしない戦争に向かい、欲する物を得られぬよりは、戦う手段を儂に寄越し、欲する物を得られる方が良いじゃろう？」

「なんだと！？」

バーサーカーと桜ちゃんを交換しろと言うのか？
俺が渡さないと言ったとはいえ、俺のせいで弱体化しているにも関わらず臓硯の勧誘を断り、私を気に入っていると言ってくれたバーサーカーを犠牲にしろと言うのか……

「バーサーカー……」
「マスター雁夜。お前はお前の信念に従え。俺はそこを気に入っているのだからな」

私の信念。
大切な者を守るために、それ以外を、自分自身を犠牲にして守る。
その信念に従うならば、答えは決まっている。

「すまない。バーサーカー……臓硯、桜ちゃんに寄生させた蟲を総て出せ！　そして、今後一切桜ちゃんに近寄るな。蟲を寄生させるな！　それがバーサーカーのマスター権を譲渡する条件だ！」
「呵々々！　良かろう。では、さっさと令呪を寄越せ！」
「ダメだ！　先に桜ちゃんの蟲を出してからだ」

不機嫌そうな表情を崩さない臓硯が杖で地面を突くと、丁度バーサーカーの真上に、虫に包まれた桜ちゃんが落ちてきた。
バーサーカーは虫ごと桜ちゃんを抱き留めた。
その腕の隙間から、蟲が地面に落ちては消えていく。
蟲が総て消え、バーサーカーの腕の中には無表情で虚ろな目をした桜ちゃんが残った。
桜ちゃんは、そこから私や臓硯、最後にバーサーカーを見て目を閉じた。

「約束通り蟲は取り除いた。バーサーカーに確認させたらどうじゃ？　魔法が使えるなら、この程度造作もないじゃろうて」

「バーサーカー、頼む」
「了解した。『生体走査』」

バーサーカーは桜ちゃんを抱え直し、額に手を触れて、目を閉じた。
バーサーカーの手が光り、しばらくして収まった。

「右の太股と左の肩胛骨の下に2匹ずつ居るな」
「どういうことだ！　約束が違うぞ。臓硯！」
「呵々々々々！　よくぞ見抜いた。これしきも見抜けずして何が魔法の使い手か。合格じゃ」

蔵硯が床を一度突くと、桜ちゃんが目を見開いて下を向いた。
そして、4匹の蟲を吐き出した。

「これで本当に総て取り除いた」

もう一度、バーサーカーに確認させる。

「大丈夫だ。もう異物はない」

そう聞いて安堵した。これで桜ちゃんは地獄から解放される。

「すまない。バーサーカー」

改めて、謝る。
おそらく、臓硯は聖杯戦争になど参加しないだろう。
臓硯の狙いは『魔法』だろう。
サーヴァントに対する絶対命令権を持つ令呪が渡れば、どんな命令も拒否できない。
臓硯はバーサーカーから魔法に関する知識を根こそぎ奪うだろう。

そしてその後は……
すまない。バーサーカー。
俺は桜ちゃんを助けるために、俺の声に応えてくれた彼を犠牲にした。

「気にするな。マスター雁夜。ああ、そうだ。マスター権限が移ったらマスター雁夜の蟲も取り除こう。その少女と共にいるなら、蟲は邪魔だろう？」

バーサーカーは最後まで私を責めなかった。
それどころか、私の身を案じてくれさえした。
本当に、私はいいサーヴァントを持った。
だからこそ悔しい。
自分の望みを叶えるために、バーサーカーを犠牲にしなければならないことが……

「さあ、令呪を持って命じよ！　儂を新たなマスターにするとな」
「バーサーカー。令呪を持って命じる。新しき主、間桐　臓硯のサーヴァントになれ！」

俺の手から令呪が総て消え、蔵硯の手に二画の令呪が刻まれた。

「マスター臓硯。短い間だとは思いますが、よろしくお願いします」
「うむ」
「それでは、雁夜に寄生する蟲を駆除します。よろしいですか？
マスター臓硯」
「許可しよう。ただし、魔法を使うことが条件じゃ」
「了解しました。『器に巣くう異物よ。我は汝に安らぎを与える者也。死こそ解放、死こそ安らぎ。汝が生は死のために。《解放の死》』」

「ぐ！　ぐあああああ」

蟲が暴れながら移動する。そして、桜ちゃんと同じように地面に吐き出した。

吐き出された蟲は苦しそうにのたうち回りながら徐々に動かなくなり、完全に動かなくなったところで灰になった。

「ほう……かなり強い蟲を寄生させたというのに、宿主を殺すことなく殺すとは、さすが魔法のつ！？」

ぼとりと何かが落ちる音がした。

その音源は、臓硯からだ。

杖を握っていた臓硯の人差し指が、根本から取れて地面に転がっていた。

その指はすぐに変色しウジ虫の大群に変わり、しばらくして灰になった。

「これは一体どういうことじゃ！？」

「ああ、失礼しました。マスター臓硯。どうやら蟲を駆除する際に繋がっていたパスから駆除の魔法が感染したようです」

バーサーカーが暢気に説明している間に、蔵硯の体はどんどん崩れて蟲になり、灰となっていく。

「貴様！　使い魔の分際で！　ええい、令呪を持って命じる。今すぐこの魔法を解け！」

「残念ですが、あの魔法は一度感染したら解くことは出来ません。その命令を実行することは不可能です」

「なんじゃ……」

最後まで言葉を出す前に歪んだ臓硯の顔が崩れた。

「さて、うっかり（・・・・）マスターを殺してしまった。このままでは、戦争に参加する前に魔力不足で消えてしまうな。さて、どうしたものか」

言っていることは重大だが、わざとらしい表情で棒読みされると、どうしても困っていると言う雰囲気を感じられない。

と、言うか『単独行動』が高いんだから現界する分には全然困らないだろ！

……やはり、聖杯が欲しいのだろうか。

いや、欲しいに決まっているな。でなければ、サーヴァントとして召喚されないはずた。

「俺がマスターに戻りたいのは、山々だが魔術回路の代用をしていた刻印蟲はさっき死んでしまったし、俺ではマスターに成ることは出来ないよ」

とは言え、マスターになったところであのパラメーターで宝具も使えないのでは、勝つことなど不可能だろう。

俺のような未熟な魔術師と契約し直すよりも、もっと他の正当な魔術師と契約した方が勝ち目がある。

「『戻りたいのは山々』と言うことは、戻れるなら戻ってもいいと？」

「ああ」

バーサーカーには助けられっぱなしだ。

俺に出来るなら、なんでもしよう。

俺の願いを叶えたバーサーカーが、聖杯を欲すると言うなら力にな

ろう。
もっとも、俺程度では足手まといにしかならないが……

「じゃあ、話は早い」

バーサーカーは頷くと、地面に魔法陣を書き始めた。
書き終えると、懐から小指の先ほどの大きさをした宝石とナイフをスーツの中から取り出した。

「この宝石に血を付けて、魔法陣の中に入ってくれ」

言われた通りにして、血を付けた宝石をバーサーカーに渡した。
バーサーカーはそれを魔法陣の中で飲み込んだ。
すると、魔法陣が淡く光り、私とバーサーカーの間に1枚のカードが現れた。
カードには数字やら方位など色々なことが書いてある。
中でも目を引いたのは、カードの中心で今の表情から想像出来ないような憤怒の表情で、大きな矛を地面に突き立てて仁王立ちしているバーサーカーだった。

「これで契約成立だ。改めて、よろしく。マスター雁夜」

右手の甲に針を刺すような痛みを感じ、確認すると二画の令呪が刻まれていた。

クリスマス番外編『第４次聖杯戦争・参戦』（後書き）

２９日から仕事納めなので、出来れば更新頻度を上げたいなーと思います。
ただ、仕事始めがいつかわからないので、上がるかどうか微妙ですが……

クリスマス番外編『バーサーカー・エリオのステータス』（前書き）

バーサーカーのエリオのステータスを公開します。
話の中ではランク不足で使用不可だった宝具も、きちんと書いてあります。

クリスマス番外編『バーサーカー・エリオのステータス』

【元ネタ】子供先生の親友シリーズ
【ＣＬＡＳＳ】バーサーカー
【マスター】間桐　雁夜
【真名】エリオット・クルーデル
【性別】男性
【身長・体重】１４０ｃｍ台・４０ｋｇ
【属性】混沌・狂

パラメーター
【本来・残り令呪３つ】筋力Ｂ　耐久Ｃ　敏捷Ｂ＋　魔力Ａ＋＋　幸運Ｂ　宝具：ＥＸ
【初期契約・残り令呪３つ】筋力Ｅ　耐久Ｆ－　敏捷Ｆ　魔力Ｅ　幸運Ｅ　宝具：×
【仮契約時・残り令呪２つ】筋力Ｄ　耐久Ｅ－　敏捷Ｅ　魔力Ｄ　幸運Ｄ　宝具Ｅ
【蔵硯マスター時・残り令呪２つ】筋力Ｃ　耐久Ｄ－　敏捷Ｄ　魔力Ｃ　幸運Ｃ　宝具Ｂ

【クラス別スキル】（）内は暴走時
狂化：Ｅ（Ａ＋）
　通常時は狂化の恩恵を受けない。その代わり、正常な思考力を保つ。
　暴走時は全パラメーターを２ランクアップさせるが、マスターの制御さえ不可能になる。

【固有スキル】

単独行動：Ａ（Ａ＋）
　通常時はマスター不在でも行動できる。ただし、宝具（常時発動の物を除く）の使用などの膨大な魔力を必要とする場合は、マスターのバックアップが必要。
　暴走時はマスター不在行動に加え、自力で宝具の使用が可能になる。

心眼・真：Ａ（心眼・偽：Ａ）
　通常時に発揮される修行・鍛錬によって培った洞察力。　窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、　その場で残された活路を導き出す“戦闘論理”。
　逆転の可能性がゼロではないなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。（暴走時は心眼・真が心眼・偽に変わる）

心眼・偽：Ａ（暴走時専用）
　暴走時のみ発揮される視覚妨害による補正への耐性。第六感、虫の報せとも言われる、天性の才能による危険予知である。

魔法：Ａ（Ｃ）
　ネギま！の世界のあらゆる等級の魔法を習得できる。ただし、自身が知っている魔法に限る。
暴走時、無詠唱で発動できる攻撃・防御魔法に限り使用可能。（中級攻撃魔法まで。治療・補助・行動阻害系は使えない）

感卦法：Ｂ（Ｂ）

通常時でも暴走時でも使用可能。
魔力と気の合一による強化。
一時的に魔力を1ランクダウンさせ、筋力・敏捷・耐久を1ランクアップする。（魔力をE未満に下げる事は出来ない）
魔力があっても、最大で3ランクまでしかアップ出来ない。

異形：A（暴走時専用）
暴走時のバーサーカーの姿。
能力不明。（決まっていますが、内緒。本編にも影響するので！）

【宝具】
『ダイラオマ魔法球』
種別：対人宝具・常時発動型　ランク：A　レンジ：1　最大捕捉：100人
『ネギま！』でお馴染みのチート魔法具の強化版。
見た目は大きなフラスコに入った箱庭。所有者が許可した者のみが入ることを許される閉鎖世界。
中での一週間が、外での1時間に相当する世界。
外からフラスコを破壊することで強制的に中に居る者を出すことが出来る。

『鵬法璽（エンノモス・アエトスフラーギス）』
種別：対人宝具・任意発動型　ランク：EX　レンジ：1　最大捕捉：1人
『ネギま！』に登場するチート魔法具で、見た目は手の平サイズの鷲（ワシ）と天秤を象った印章。

契約を一方的に履行させる力をもち、相手に契約の条件を提示し、相手が承諾に値する言葉を口に出した時点で発動する。
強制力は令呪並であり、契約を反故にすることはまず不可能。
ただし、細かく条件を提示しないと抜け道を突かれる恐れがある。
なお、宝具を破壊すれば、契約を無効に出来る。宝具自体の強度は同じサイズの石くらい。

『背律へ向かう背水』
種別：対自宝具・常時発動型　ランク：E　レンジ：—　最大捕捉：—
エリオのサーヴァントとしての肉体そのもの。
令呪が失われる毎に、全パラメーターを1ランクアップする。

【アーティファクト】
『集約せし憤怒の矛』（アーティファクト）
種別：対自宝具・任意発動型　ランク：D　レンジ：1　最大捕捉：1人
暴走時に使用する宝具。
狂化による能力の上昇を1つの能力に集約させることが出来る。
（集約できるのは、あくまで狂化によって上昇したランク分のみ）
そのため、狂化による能力補正がない通常時ではただの武器でしかない。
ちなみに武器としての性能は、頑丈で壊れない鈍（なまくら）。

【解説】
ネギま！の世界から召喚されたバーサーカーの英霊。
バーサーカーと言う割りに、狂っていない。

自身と同じ大切な者を救うために周りを切り捨て、自分さえも犠牲にしようとする間桐　雁夜を気に入る。
臓硯を一時的にマスターとしたが、すぐに離反。雁夜と新たな契約を結び、聖杯戦争に参加する。
聖杯への願いは、記憶の継承の中止。
ただ、エリオ自身は聖杯（の性能）を信じていない。（人が作ったものである以上、人が叶えられる範疇しか叶えられないだろうと推測）

＜契約カード＞
主名：間桐　雁夜
従者名：エリオット・クルーデル
称号：『静かなる狂人』
カード番号：２５
徳性：狂気
色調：歪み（背景の色が一定せず、常にいろんな色が渦巻いて混ざっている）
方位：中央
星辰星：冥王星
＜エリオットのアーティファクト＞
『集約せし憤怒の矛』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0093w/

子供先生の親友～外伝

2011年12月26日01時09分発行